

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

「旅に出よう」

その感覚は人の心の根っこに潜む独特の感情の一つだと思ふ。きっかけの大方は、何かの節目だ。

心をチェンジするときや、学びを得ようとするとき、はては大きく前に進む決意を持ったときなど、言い換えれば強い意志で未来を変えようという意思が人を旅に誘うのだから。私自身、絵を描くよりどころの一つに旅がある。もちろん新しいインスピレーションを求めてだ。

俳人正岡子規が、1893（明治26）年、病を押して東北を旅した事実を知ったのは、2年前のことだ。彼の歌詠み旅日記は「はて知らずの記」として「新聞日本」に連載された。

彼は何を東北に見たのだろうか。「はて知らずの記」を歌枕に、子規の影を宮城に追ってみよう。そう思ったとき、私の新しい旅が始まった。

子規が東北に出発した場所は東京・根岸。鶯谷駅に降り立ち、旅立ちの場所をようやく探し当て振り返った。と、数軒先に、子規の句をたどる旅人と「子規庵（あん）」が見えた。 Ⅱ次回は27日掲載Ⅱ

ふるやま・たくさん 画家、イラストレーター。19

62年盛岡市出身。

水彩旅風景の個展と

広告挿絵の2本柱で

活動中。2008年

仏・パリで開かれた「ようこそ！東

北へ」（国土交通省主催）において東北風景紹介作家としてメイン展示。青葉区在住。



## 歌枕携え旅が始まる

東京・根岸



みちのくへ涼みに行くや下駄はいて子規

根岸子規庵

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

愛島（名取市）の道祖神社を詣でた子規は、実方中将の墓所へと歩を進めた。距離は神社からさほど遠くない。街道筋から脇道にそれ、ほどなく墓は見つかった。標柱脇の二房のススキが目についた。子規の岩沼途中下車は、実方中将ゆかりの地を訪ねることになったわけだが、墓所で西行の足跡と出会っている。今も柵で囲われたその傍らには、西行の句が彫られた石碑が立つ。

こけむした表面を思わず指でなぞる。子規から見つめられているような、くすぐったい感覚。彼も、間違いないここに立っていた。そう考えただけで、吹き抜ける風が百余年の歳月を払い去った。実方中将が葬られた名取を西行、芭蕉が子規が訪れた。そして今、何の縁（えにし）かそこに立つ自分がいる。子規は西行との邂逅（かいこう）で、切ないまでの旅人の心境をこの地に詠み上げた。

古今東西、人は不安を抱えながらそれでも旅を進めた。それは何かにつながら、どこかへ還（かえ）るためだったのではないか。愛島風景を眺めながら、そう思った。（画家、イラストレーター）

|| 次回は8月1日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 西行の石碑に縁重ね

岩沼、愛島②

旅衣ひとへに我を護りたまへ子規



拓 F

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

月に寝ば魂松島に涼みせん 子規  
明治26年7月27日、子規仙台到着。上野をたち8日目のことだ。仙台にたどり着いた子規は、体力回復のため数日間滞在する。冒頭の句は、憧れの松島を眼前に仙台の宿で詠んだ句だ。

病身を押ししての旅だ。岩沼から愛島を徒歩で訪ね仙台へ。この強行軍は彼の体力をこっそり奪い取った。しかしそれでも心はずでに月下の松島に遊んでいた。切ないまでの憧憬（しょうけい）。そんな子規は仙台に何を見たのだろうか。

仙台駅の北に、一本の高架橋がある。宮城野橋＝通称X橋だ。たもとは古びたれんが造りの隧（すい）道が残っている。明治のころ高架は無く、必ずしも子規が見た風景とは一致しない。けれど「仙台と子規」という歌枕で私の脳裏に浮かんだのはその隧道だった。

時の積み重ねは美しい。その美しさは暮らす人々の思いの地層だ。X橋の隧道を見るとそんな思いが胸に迫る。子規の仙台滞在は、きつと名もない誰かの心に刻まれた。そして仙台を形づくる「地層」の一部になっているに違いない。

（画家、イラストレーター）  
次回15日掲載

## 時間と思い 積み重ね

X 橋



「増田迄まで一里の道を覚束なくも辿りつきて汽車仙台に入る。」

（はて知らずの記）

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山拓

榴岡公園（宮城野区）。仙台に暮らす人なら一度は訪れたことがあるに違いない。子規も明治26年7月28日に立ち寄っている。「明日は必ず扶桑第一の山水に對せん」と記した翌日のことだ。松島を「扶桑第一」（扶桑は日本の古称）と言いつけるあたりに、子規の松島への思いがにじむ。彼は松島へ向かう途中、榴岡を古歌の名所と言いおよび、今の公園付近に遊んでいる。

表題の句から察するに、立ち寄った所は旧陸軍の兵舎だった歴史民俗資料館付近ではないかと思う。夏の強い日差しの下、隊列を組む兵の姿が脳裏に浮かぶ。今回、私も榴岡では、旧兵舎と桜並木を描くつもりでいた。しかし現地では足が止まった場所は違っていた。公園の外縁だ。再開発で開けた二十人町のさら地越し、一軒の商店が消えゆく町の証人のように建つ。奥に広がる宮城野の丘。その曲線に子規の残像が重なった。

そうか、榴岡は「丘」だったんだ。今まで地名の意味を考えずに口にしてた自分を恥じた。と同時に、その丘陵地は、榴岡に遊ぶ子規の姿を記憶しているのではないか。そう思った。

（画家、イラストレーター）

次回は29日掲載

ファミリー

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 古歌の名所 丘に遊ぶ

榴岡



兵隊の行列白し木下やみ子規

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山拓

話は前回の塩釜神社から続く。かつて歌人にとって、塩釜は憧れの地の一つだった。藻塩焼きの神事が歌枕となり、紫式部も塩釜を歌に詠んでいる。子規もまた、神社の眼下にたなびく煙を「塩焼く煙かと見るは汽車汽船の出入りするなり」と記している。

この描写は、旅人歌人ならではの表現だと思ふ。塩焼く煙という歌枕と、時代の先端技術が吐き出す黒煙。彼は時代の移り変わりを「はて知らずの記」にさりげなく描写した。

旅人が前に進むための原動力の一つは、「想像力」だ。今の風景を見つめ、色あせた歳月に思いをほせ、脳内で再生させる。そんなふうになつてつながら歴史に血肉を通わせることも、旅の要の一つだと、私は思う。

「山水は依然たれども見る人は同じからず」（はて知らずの記より）

子規の塩釜訪問から百余年。塩釜神社の眼下、名をなした歌人たちの焦がれし「山水」が変わらずにあった。

旅人の想像力はたくましい。子規は明治の塩釜に、はるか平安の時を見た。

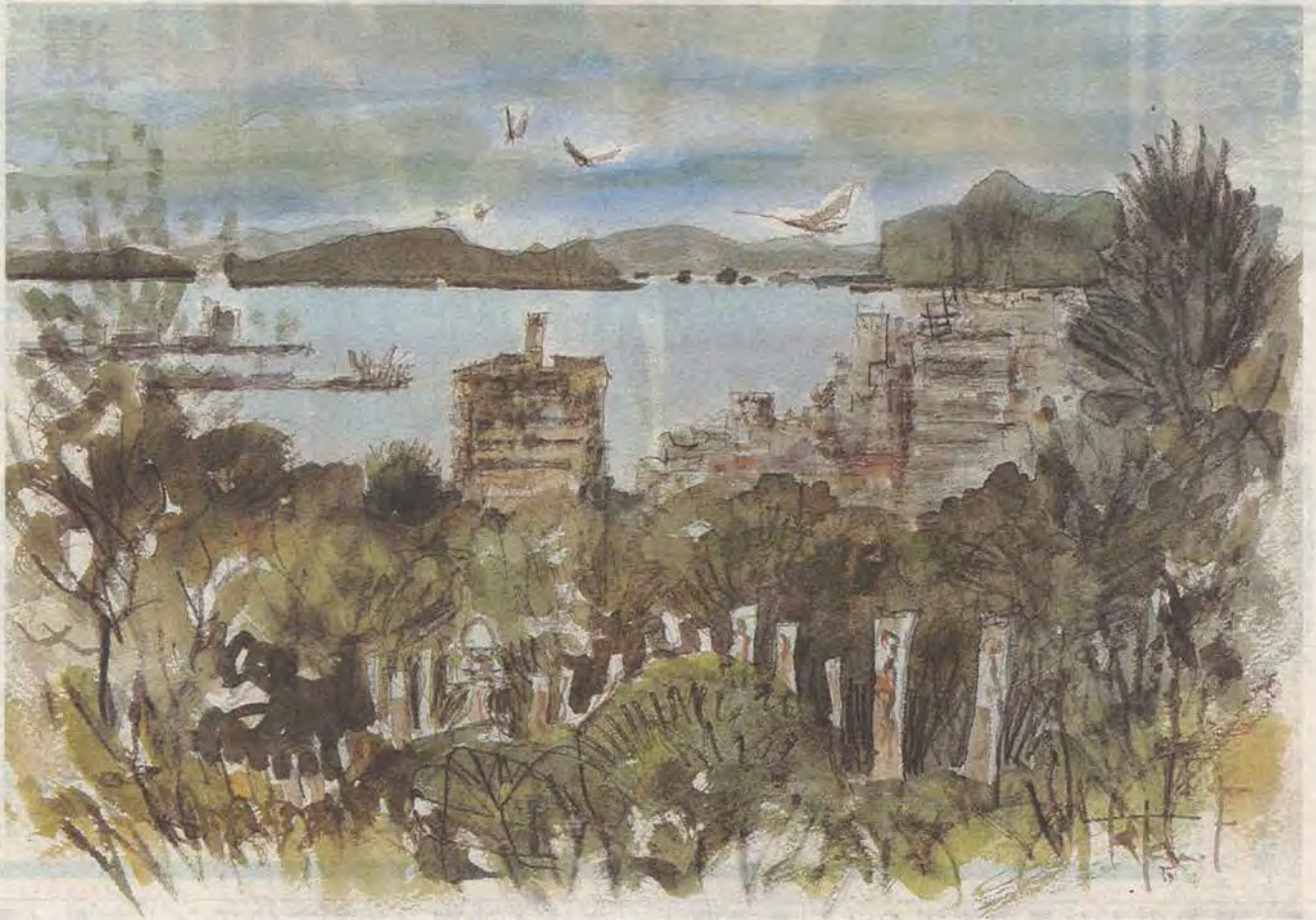
（画家、イラストレーター）

次回10月3日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 平安の山水 頭に描く

塩釜②



涼しさの猶<sup>なほ</sup>有り難<sup>がた</sup>き昔かな子規

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

仙台を後にした子規は、汽車で松島に向かうが塩釜で下車している。子規の旅は奥の細道をたどる旅だ。芭蕉と同じく塩釜から船で松島へ渡っている。今回の歌枕となった塩釜を訪ねた日は、7月29日。子規が明治26年に塩釜を訪れた日と同じだった。

本塩釜駅で降りる。東日本大震災の後、子規がたどったルートはどれだけの被害に遭ったのか？ 恐る恐る駅舎を出た。重機の音が響き、作業員が立ち働いている。商店街のあちこちで1階部分がひしゃげていた。1000年に1度と言われる津波の爪痕だ。沈む気持ちをねじふせ、子規が訪れた塩釜神社へ向かった。

境内には、和泉三郎忠衡（藤原秀衡の三男、源義経を守った武将）寄進の灯籠が立つ。いわば平泉黄金文化の名残だ。芭蕉が言葉を残し、子規もまた「はて知らずの記」に思いをつづっている。思いがけず出会った平泉のはるかな残照に、1000年を経て試練に立ち向かう東北人の意気が重なった。灯籠越しに奥を見ると、社殿が静かにたたずんでいた。

（画家、イラストレーター）  
 次回9月12日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 「平泉」の残照に感慨

塩釜①



炎天や木の影ひえる石だ、み子規

拓山

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

「山やうやうに開きて海遠く広がる。船より見る島々縦に重なり横に続き遠近弁へ難く其数も亦知り難し。一つと見し島の二つになり三つに分かれ：（中略）：我位置の移るを覚えず海の景色の活きて動くやうにぞ見ゆるなる。」（「はて知らずの記」より）

塩釜から船上の人となった子規の松島湾描写だ。私も塩釜汽船発着所から乗船し、湾内クルーズとしゃれ込んだ。目指すは子規と同じく松島の船着き場だ。

太いエンジン音が高まると、汽船は岸壁を離れ湾内に滑り出した。遠くに二つに見えていた島が、進むにつれ二つ三つと分離していく。子規の描写と同じだ。写真では味わえない動的な面白さ。

私の心をささめかせたのは、養殖いかだや、湾内に突き立てられた竹の杭（くい）だ。海原と島々が主旋律なら、カモメたちが羽を休めるそれらは対旋律か。風光明媚（めいび）なだけではない、波間にのぞく漁民の暮らし。松島湾の魅力は、海に生きる人の力強さと島々のハーモニーだ。子規もまた、それらが奏でる極上の音楽を「見た」に違いない。

（画家、イラストレーター）

|| 次回は24日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の

足跡をたどるために東北を旅し、

紀行文「はて知らずの記」を著し

た。子規が俳句に詠んだ場所を宮

城県内に訪ね、その足跡と「いま」

を水彩画と文でつづる。

## 松島湾①

## 海の奏でる音「見る」



涼しさやかもめはなれぬ杭の先子規

## 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山拓

子規は、權（かい）こぐ船頭の松島紹介口上を次のようにつづった。「…舳（へさき）に当たりたるは観月楼、楼の右にあるは五大堂、楼の後ろに見ゆる杉の林は瑞巖寺なり。瑞巖寺の左に高き建築は観瀾亭、悄悄観瀾亭に続きたるが如きは雄島なり」

そして船着き場へ接岸。子規は松島上陸の感激を「恍惚（こうこう）として観月楼に上る」と「はて知らずの記」に記した。

今回の句は、私が五大堂を船上から見つけた時に思い出した句だ。船で松島に入ると、五大堂や観瀾亭が海原に向かつて「正座」していることに気づく。海原が扇なら、門前町松島が要か。海上交通が大動脈だった昔、ランドマークが海へ向かって座しているのは、至極当然だ。陸から見ているのでは分からない。

船着き場前の宿に投宿した子規は、通された部屋の障子を開く。と、そこには焦がれていた島々が広がっていた。

仙台を出て榴岡、塩釜、そして松島へ。子規の長い一日は、さらに門前町散策へと続いていく。

（画家、イラストレーター）

次回は11月7日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 海上のランドマーク

松島湾②



涼しさのこころを扇のかなめかな

子規



# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山拓

瑞巖寺山門前の宿に荷物をおろした子規が、最初に訪れた場所は観瀾亭だ。秀吉が政宗に与えた茶室が移築されたものだ。「はて知らずの記」にガイドブックさながらに記されている。

子規憧れの地だ。松島を歩き始めた彼の高揚感(紀行文にも現れている)。観瀾亭に言及するポリュームからは、感激した様子が十二分に分かる。観瀾亭で島影を眺めたのち、彼は瑞巖寺、そして五大堂へと歩を進める。

松島が日帰り圏の距離に住む私は、何度もこの名勝を訪れ、放つ魅力を楽しんできたつもりだ。けれど、今回の松島行は何か違った。子規のつづった紀行文をたどりながら訪ねた松島は、まるで、彼の網膜に時を超えてアクセスしているような、そんな感覚だった。子規の目に入り込む感じと言えは分かりやすいだろうか。

気が付くと五大堂の前に、かばんから鉛筆を取り出ししていた。

「子規の目線を描く松島も面白いな。彼が句に詠んだ欄干の赤い弧を捉えながら、そんなことを思っていた。」

(画家、イラストレーター)

|| 次回は21日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」

## 時を超え日線重ねる

松島①



すゞしさを島から島へ橋つたひ

子規

## ファミリー

## 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山拓

前回、絵筆の勢いで割愛してしまった瑞巖寺訪問のことを書くことと思う。松島で瑞巖寺を避けては通れない。

先の津波被害を辛くも逃れた瑞巖寺は伊達政宗の菩提(ぼだい)寺でもある。塩釜港岸壁に山積みされたがれきを横目に松島に渡ると、何か大きな力が松島を守ったのではないかとさえ思えてくる。

「古雅幽静はなほた愛すべきの招提(しようたい)寺院」なり」とは子規の瑞巖寺へ向けた言葉だ。反面、俳句が彫られた石碑群には「殆(ほとん)ど見るべきなし」と手厳しい評を残している。彼が唯一認めているのが「春の夜の爪あがりなり瑞巖寺」なる句だ。

私はこの句碑を探してさまよったが、ついぞ見つけることができなかった。諦めて拝観券を買い、庫裏へ上がった。そこには伊達家の威光が差していた。

子規が政宗公の眼(まなこ)を言葉に選び「土用干し」と言い及んだ宝物群。しかし、今の瑞巖寺は大改修に入っており、全容を見ることがかなわなかった。私は改修後の「土用干し拝観」を自分に約束し、庫裏を後にした。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は12月5日掲載 ||

## 威厳あふれる瑞巖寺

松島②



政宗の眼もあらん土用干

子規

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

松島水族館裏手のヨットハーバーを横目に、岩塊をくりぬいたほの暗いアプローチを進む。と、そこに小さな島が浮かんでいる。その昔、修行僧が石庵(あん)を結び、死者の魂を鎮め祈ったという雄島だ。先の大津波で橋が流され、残念ながら今は渡ることがかなわない。

塔婆のごとく石碑が林立する島は、まさに祈りの場所だ。子規も訪れているが、記述はわずかの行と「すゞしさを裸にしたり座禅堂」の一句で終わっている。

私が雄島を訪れる度に思い出す島がある。それは、西のかなたアイルランドのはずれ、大西洋に浮かぶアラン島だ。

アラン島を旅したのは10年以上前のことだ。岩盤からなるその島には土が、ない。それでも島民は岩を砕いて海藻を敷き、じゃが芋を育て、荒海へと漁に出る。何も無いと言えはそれまでの島だ。けれどそこは、無力な人間の「生きる」という、魂の声に満ちていた。

雄島もしかり。主がいなくなった石窟に吹きつける風が魂の声となって胸に響く。雄島は私にとってのもう一つのアラン島なのかもしれない。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は19日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 雄島に満ちる魂の声

松島③



「細径ぐるりとまはれば石碑ひしひしと並んで木立の如し」

(はて知らずの記)

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

雄島を訪れた子規は、その日のうちに船で富山（松島町）へと向かう。目指すは奥州三観音のひとつ富山観音だ。

下船後、彼は地元の子どもの道案内で、小山の頂にある富山観音への急な坂をひたすら登る。体調芳しくない子規にとって、この行程はかなりの苦行だったに違いない。

「はて知らずの記」に、実は「涼し」という言葉が、頻繁に登場する。真夏の旅ゆえ涼を求めたということもあるだろう。けれど子規の足跡をたどると、病による疲労を風景に癒やされたゆえの「こころの涼しさ」だったのではないかと、私には思えてならない。

私が富山を訪れたのも夏の暑い盛りだった。汗だくになって階段を進む。「取材とはいえ、暑い夏は避けた方がよかったな」などと不埒（ふらち）な考えが頭をよぎる。登り切って、富山観音を背に振り返ると、眼下に広がる松島に思わず息をのんだ。同時に心に吹き渡ったのは、思いもよらぬ一陣の涼風…。

子規が松島眺望に詠んだ「涼しさ」の意味を、からだで理解した瞬間だった。

（画家、イラストレーター）

|| 次回は1月16日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の

足跡をたどるために東北を旅し、

紀行文「はて知らずの記」を著し

た。子規が俳句に詠んだ場所を宮

城県内に訪ね、その足跡と「いま」

を水彩画と文でつづる。

## 眼下の眺望 心に涼風

### 富山観音



涼しさのこころからも眼にあまりけり子規

ファミリー

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

富山観音を下った正岡子規は、再び船上の人となる。塩釜で船を下り、多賀城政庁跡へ先を急ぐ。そして遺跡の傍らに立つ「壺の碑」(つぼのいしづみ)を前に詠んだのが、今回の句だ。壺の碑とは、西行らによって詠み継がれたみちのく憧憬(しょうけい)の歌枕なのだという。

言うまでもないが、多賀城は、大和の時代、蝦夷(えみし)征伐において朝廷側の拠点となった地だ。対蝦夷戦の前線基地といえは分かりやすいか。そんな時代から時は千年以上過ぎ去った。けれど東北に根を持つ者にとつては、多賀城跡は今なおアイデンティティーを問いかける場所の一つと思えてならない。

岩手生まれの私は、表題の句を歌枕にこの絵を描いたのか?と問われると、答えに詰まる。あえて返すなら、私の歌枕は、丘の向こうに連なる「蝦夷の時代から今につながる名もない人々」だ。

過去は、時として墓石のような衣をまとう。しかし、何げない風景の向こうに目を凝らすと、キャストとカット割りを交えつつ、今なお繰り返される「歴史」が見え隠れしている。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は30日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

# 風景の向こうに歴史

多賀城



のぞく目に一千年の風すゞし子規

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

私は、旅がくれる贈り物の一つに、「匂い」があると思っている。旅先で無意識に嗅いだ街角の匂い、食堂の換気、通り過ぎる香水の香り…。場所ごとに異なる匂いは現地でしか得られない。

旅先の匂いの記憶が効果を發揮するのは、日常に戻ってからだ。鼻先をかすめた空気が引き金となり、ふと旅の記憶が呼び覚まされる。はるかな地を空気がまると思い出す、極上の旅の土産だ。

そんな嗅覚を強く刺激する場所の一つが、駅だと思う。レールの鉄臭さをベイスに、駅舎に行き交う人々のさまざまな思いが振りかけられているのだから、当然と言えば当然かもしれない。

今回の匂いは、正岡子規が多賀城から仙台に戻る途中立ち寄った、岩切駅に詠んだものだ。彼は駅舎の匂いを吸い込んだ。旅を終え日常に戻った子規は、東京の空の下でふとした拍子に岩切の空気を思い出したのではないか、そう思いたい。

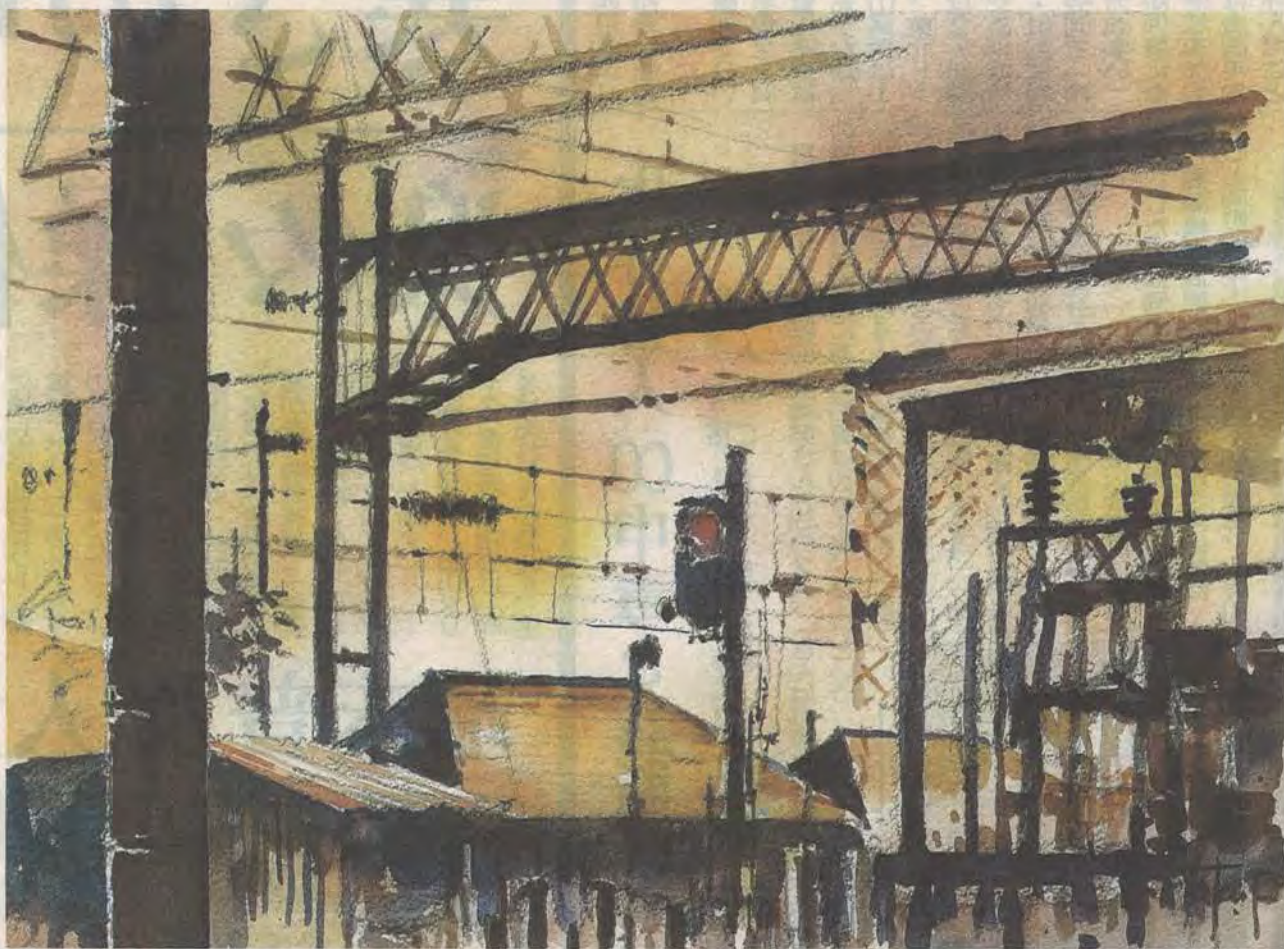
塩釜、松島、そして多賀城とわずか2日間で史跡を訪ねまわった正岡子規。上野駅を出発した7月19日から、数えて12日がたっていた。

(画家、イラストレーター)  
|| 次回は2月13日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡を「いま」

## 駅の匂いが極上の土産

岩切



蓮の花さくやさびしき停車場子規

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

松島遊覧から戻った正岡子規は仙台市内に投宿。はて知らずの記の草稿には「針久に投ず」という一文がある。文献等に国分町付近と仙台駅周辺に同名の旅館を見つけたが、残念ながら両方とも今はない。子規がどちらの宿に泊まったのかは分からない。旅を通して二つの針久に投宿したとする説もある。

どちらにせよ日々強烈な刺激を受ける子規にとって、宿は一日で最も心安らぐホームだったに違いない。ホームはたどり着く地でもあり、出発の地でもある。

さて、松島の刺激を宿で鎮め、新しい一日に出発した子規は、仙台に何を見たのか。かかる抜粋を今にたどってみよう。

大橋を青葉山へ渡り右に折れる。直進すると澁橋が広瀬川をまたぐ。南山閣とは国見の高台にあった伊達家老石田家の別荘だ。察するに子規は大崎八幡を横目に唸坂を上り、南山閣へ。訪ねた槐園(かいえん)とは、鮎貝槐園。気仙沼出身の歌人落合直文の弟だ。

明治の時代、南山閣は文人歌人が集まるまさにホームだった。仙台での子規の数日(ここに始まる)。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は27日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 南山閣で文人と集う

大橋



「旧城址の麓より間道を過ぎ広瀬川を渡りかいえん槐園子を南山閣に訪ふ」

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

実は私はこの句をもとに、書家と一つの作品を共作したことがある。私が墨画を描き、同じ紙に書家が子規の句を揮こうした。この共作で私は、作家がお互いの心の深い領域まで踏み込まないと作品にならない、という貴重な経験をさせてもらった。もともと作品が完成したのは、私の稚拙さを、書家が鷹揚（おうよう）に構え補ってくれたからに他ならない。

何を言いたいかというと、表現者のキヤッチボールで生まれる化学反応の面白さだ。正岡子規は、国見の南山閣にて、歌人鮎貝槐園（かいえん）といくつもの歌詠みを交わす。子規が「涼しさのはてより出たり海の月」と詠むと、同じ心を槐園は次のように返したという。

はたゝかみ遠くひゞきて波のほの月よりはるゝ夕立の雨 槐園

文人が集った南山閣には、きらめくような言葉の化学反応が起こっていた。国見に生まれた作品たちは、表現者同士の魂の交歓だったのではないだろうか。

国見の高台の今は、住宅地だ。何本もの電柱と遠くに見える木々が、「夕立だった青葉山」をトリミングしていた。

（画家、イラストレーター）  
次回は3月12日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 魂の交歓が作品生む

国見



夕立の見るく山を下りけり子規



ファミリー

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

毎回いかにも知っているかのように書いているけれど、絵描きの調査なんてたかが知れている。多くの識者が労を重ねた文献や、連載をきっかけに情報をくれる人たちの助けを得て、一つの視点で不器用に織り上げているにすぎない。

その織り糸は、多くの助けと、訪れた現地で喚起された印象、そして描いている時に脳裏に降ってくる言葉たちだ。

国見に遊んだ正岡子規は翌日、愛宕神社を訪れる。明治26(1893)年、今の愛宕橋はまだない。舟丁から簡素な木橋だった宮沢橋を渡り愛宕山へ向かう。私も宮沢橋に立ちスケッチブックを取り出した。それまで多くの文献や人々がくれた情報が想像力と出会い、勝手に脳内で映像を結び言葉を紡ぎ始めた。

「宮沢渡りにはほど曲がるんだい？」と尋ねる子規が心に遊ぶ。そこには短い会話でも子規とつながる人がいた。ふと「助け」という言葉が舞い降りた。

「そうか、『つながる』ということとは『助ける』ということなのか」「なんだ、今ごろ分かったのか？」と、子規が私を振り返ってつぶやいた。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は26日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

# 麓の仮橋 つながる人

愛宕山



宮沢渡りの仮橋を渡りて愛宕山の仏閣に上る。

(はて知らずの記)

ファミリー

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

子規が広瀬川沿いにある愛宕神社に登ったのは8月2日だ。「はて知らずの記」には、崖の真下、広瀬川に遊ぶ釣り人や、川泳ぎに興じる人の描写がある。けれども句の記載はない。

実際、神社に登ってみた。冬枯れの木々の向こうにビル群が広がっていた。寒い日ではあったけれど、街を自分の腕に心地よく抱え込める、そんな場所だ。

断崖から対岸を見た子規が、このアングルを前に句を詠まなかったはずはない、そう思い草稿集を当たってみた。

実は「はて知らずの記」は、半紙に墨書された草稿がベースとなっている。16枚が今に残り、紀行に掲載されなかった句をも知ることが出来る貴重な資料だ。しかし残念ながら愛宕神社の記述にかかると一枚は欠落紛失していた。

何事においても、分らないことは、イコールマイナスではない。思いを巡らすという遊びがそこには生まれる。この風景を前に、子規はどんな言葉で遊んだのか。私なりに一句、と構えてみたが、分かったのは己の歌詠む才のなさ。結局、川向こうの仙台市街に絵筆で遊んだ。

(画家、イラストレーター)

次回4月9日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

愛宕神社

見えぬ句 思い巡らせ



川のかなたは即ち仙台市にして高楼画閣掌中に載すべし。

すなわ

(はて知らずの記)

ファミリー

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

子規仙台遊覧の一日は、宮沢仮橋を渡り愛宕神社に詣で、伊達政宗の靈廟(れいびょう)瑞鳳殿を訪ねることで終わる。彼は廟へのアプローチの印象を「老杉翁鬱山路幽凄堂宇屹然として其間に聳ゆ」と記している。現地に立った私は、あらためて彼の言葉のデッサン力の確かさに立ち止まってしまった。

現在の瑞鳳殿は、第2次大戦の空襲で焼け、1979年に再建されたものだ。しかし子規は1637年に建てられたままの姿を明治期に見た。当時、門は閉ざされていたようだ。彼はその隙間から靈廟の彫刻彩色に感嘆し、句に「君」と詠んだように伊達政宗へ思いをはせている。

スケッチブック片手にその瑞鳳殿を歩いたけれど、どうにも子規の姿が脳裏に浮かばない。実は今までの連載の絵の多くは、子規の姿が構図の中にオーバーラップしたときに筆が走っている。廟を描くことを諦め、感仙殿へ向かう道にさしかかった時、ふと子規の後ろ姿が道の先に見えた気がした。

冒頭の句の「君」。それは私にとって、まぎれもなく子規だった。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は23日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城真内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

瑞鳳殿

霊廟訪ね「君」を思う



涼しさや君があたりを去りかねる子規

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

絵は国見のうなり坂付近から山形方面を見たものだ。5日間の仙台滞在後、子規は、山形に向けて旅立つ。最後の2日間は国見の南山閣に滞在し歌人鮎貝槐園(かいえん)と文学談議に花を咲かせている。8月5日、2人は共にうなり坂を下り、大崎八幡神社の門前で分かれ、子規は出羽路を歩き出す。

右へ行くか、左へ向かうか。

この時の感覚ほど「旅」の機微を集約している気持ちはないと思う。見知らぬ地で分かれ道にぶつかった時の、全身がアンテナになったような感覚。私も今までいくつかの異国の地をさまよったけれど、岐路に立ち感度を高めることが、風景や人との出会いを招いてくれた。

出羽路という、見知らぬ世界への岐路に立った時、子規はどんな感覚で歩き出したのだろう。

この回が掲載される4月は、この国ではさまざまな岐路がおとずれる春だ。

日々是(これ)旅なり。

人生のつじに立ったとき、道筋を自分の決意で選び取る。そのことは、輝く未来へつながっていると信じて。

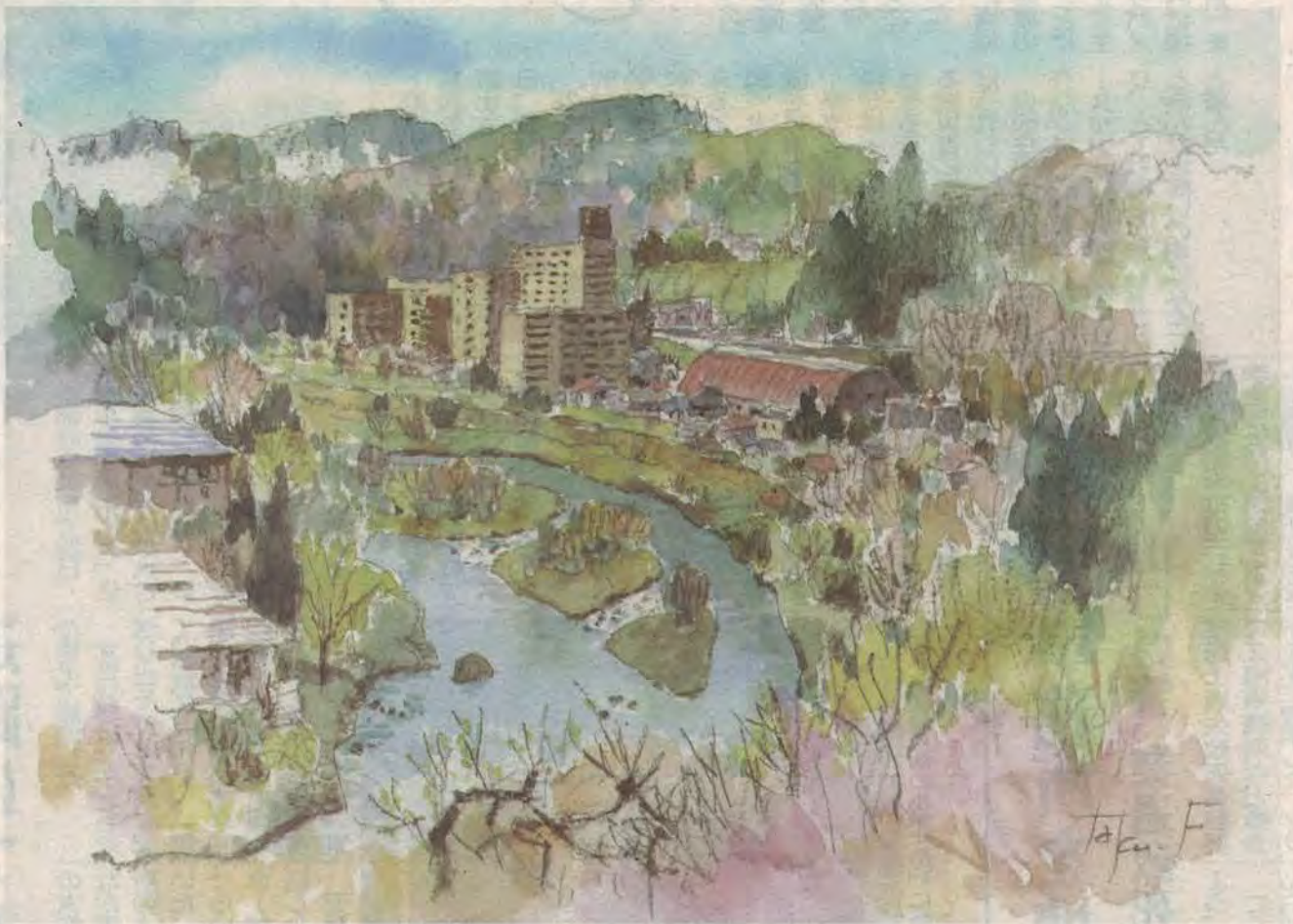
(画家、イラストレーター)

次回(5月14日)掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」

## 期待むら膨らむ岐路の旅

国見



涼しさを君一人にもどし置く子規

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

子規は、出羽へ向かうルートとして関山越えを選ぶ。それは広瀬川に沿った。徒歩で峠へ向かう彼に、川渡る風は最上の涼だったに違いない。

以前、広瀬川を源流付近から河口までたどったことがある。きっかけは、広瀬川をテーマに開催された美術展だった。私にとって制作のための現地取材は新鮮だった。広瀬川の魅力をいかに素通りしていたことか。その地に暮らしていると、当たり前すぎて見逃していることは思いのほか多いものだ。

当たり前といえば、今、普通に使われている表現に口語体がある。思考をしゃべり言葉に置き換えるというそれは、実は明治の表現変革を経て、たどり着いたものだ。子規は友人であった夏目漱石らとともに思考表現の維新に関わった。

子規の文体は単純明快だ。冒頭の言葉はわずかり文字。だがそれは、子規が、文学者として時代と戦っている姿だと私は思う。

当たり前前に見える原野に、疑問符というくわをぎくりと振り下ろす。そのくわが新しい時代を切り開いてゆく。

(画家、イラストレーター)

次回(28日付)

## 川渡る風は最上の涼

八幡



廣瀬川に沿って遡る

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

(はて知らずの記)

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

八幡から国道48号を山形方面へ向かうと、広瀬川をまたぐ牛瀬橋がある。子規が取った道筋は、橋の手前を右に折れ川を左に見るルートだ。しばらく進むと、赤い小さな新落合橋がある。彼はそこで広瀬川を渡り愛子へと向かった。

実際に現地を訪れた。小さな畑や民家、社屋がぼつぼつと続く静かな風景だ。右手には山が迫り、左手にはうつろつとした木々越しに、川へと落ちこむ対岸が見え隠れする。

話はそれるが、先日、ある会合で仙台藩の町づくりの話を聞く機会を得た。興味深かったのは講師の方が「時を経て町並みは変わったけれど、『空間』は変わっていない。そのことの大切さに気付いてほしい」と語っていたことだ。

ともすれば、時代とともに景観は変わったと思いがちだ。だが山河の醸す「空間」はそう変わるものではない。確かに100年という時は、多くの建物のたたくまいと行き交う人のいでたちを変えた。しかし子規が渡った広瀬川と川岸、山塊を作り出す空気の器は、彼がたどった空を今に伝えているように思えた。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は6月11日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を書いた。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」

## 山河の醸す空間 今も

陸前落合



陸前落合橋より見ると

涼しさや山の下道川つたひ子規

ファミリー

子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

落合から愛子を抜けた子規は、作並へと向かう。はて知らずの記に、「野川橋を渡りて…」というくだりがある。表題の句は、今の地名でいう熊ヶ根付近の風景描写の後に紹介されている。

子規の東北旅を知る前に野川橋周辺をスケッチ旅で知っていた私は、彼の記述に思わずうなずいていた。ちなみにこの橋は、小さいながらも現役だ。

野川橋付近の風景を知ったのは、広瀬川上流にモチーフを探していた時だ。陸前白沢を過ぎて小さな脇道を見つけ、くねる坂道を下っていった。辺りには旧街道の「におい」がしていた。広瀬川に架かる野川橋に立ち、左右を見渡した。蛇行する川面からそり立つ黄土色の地層に思わず息をのんだ。

仙台近郊のあちこちをスケッチして歩いているけれど、この場所を見つけた時の興奮はいまだに忘れられない。素晴らしい風景との出合いは脇道にせれる楽しみを知っている人に与えられた特権だ。涼を求め川原に遊ぶ家族連れの歓声が、水面を渡る。子規の句に、初夏の色がオーバーラップしていた。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は25日掲載 ||

川面に立つ黄土の美

熊ヶ根



山奇なり夕立雲の立ちめぐる子規

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

熊ヶ根から作並へひたすら歩く子規は、その風景を表題のようにつつづいていく。見知らぬ地を進む旅人としての心境を、この一文は見事に表している。

以前、英国のダートムアなる荒野を、ひとり徒歩で歩いたことがある。もちろん地図は持っていた。けれど初めてたどるルートだ。風の音と自分の足音、そして呼吸音しか聞こえない世界にじわりと不安感が迫ってくる。子規の一文から私はそんな荒野の旅を思い出していた。

風景は、そのときの気持ちで見え方が変わるものだ。楽しい気分で見上げる山と、不安感に包まれて囲まれる山では、その迫り方は全く違ったものとなる。色彩もまた同様だ。山も木々も空模様も、それ自体はただそこにあるだけだ。けれども実はその姿は、見る人の心模様に応じて優しくも厳しくも変化する。

作並街道の傍らへ車を止め、細い歩道を歩き出した。傍らをこぎ音を立て大型車両が通過する。風圧がすごい。しばらく歩き、ふと子規が「感じた」風景はここだ、と立ち止まった。スケッチブックを開き、山並みと対峙(たいじ)した。

(画家、イラストレーター)

次回(7月9日)掲載

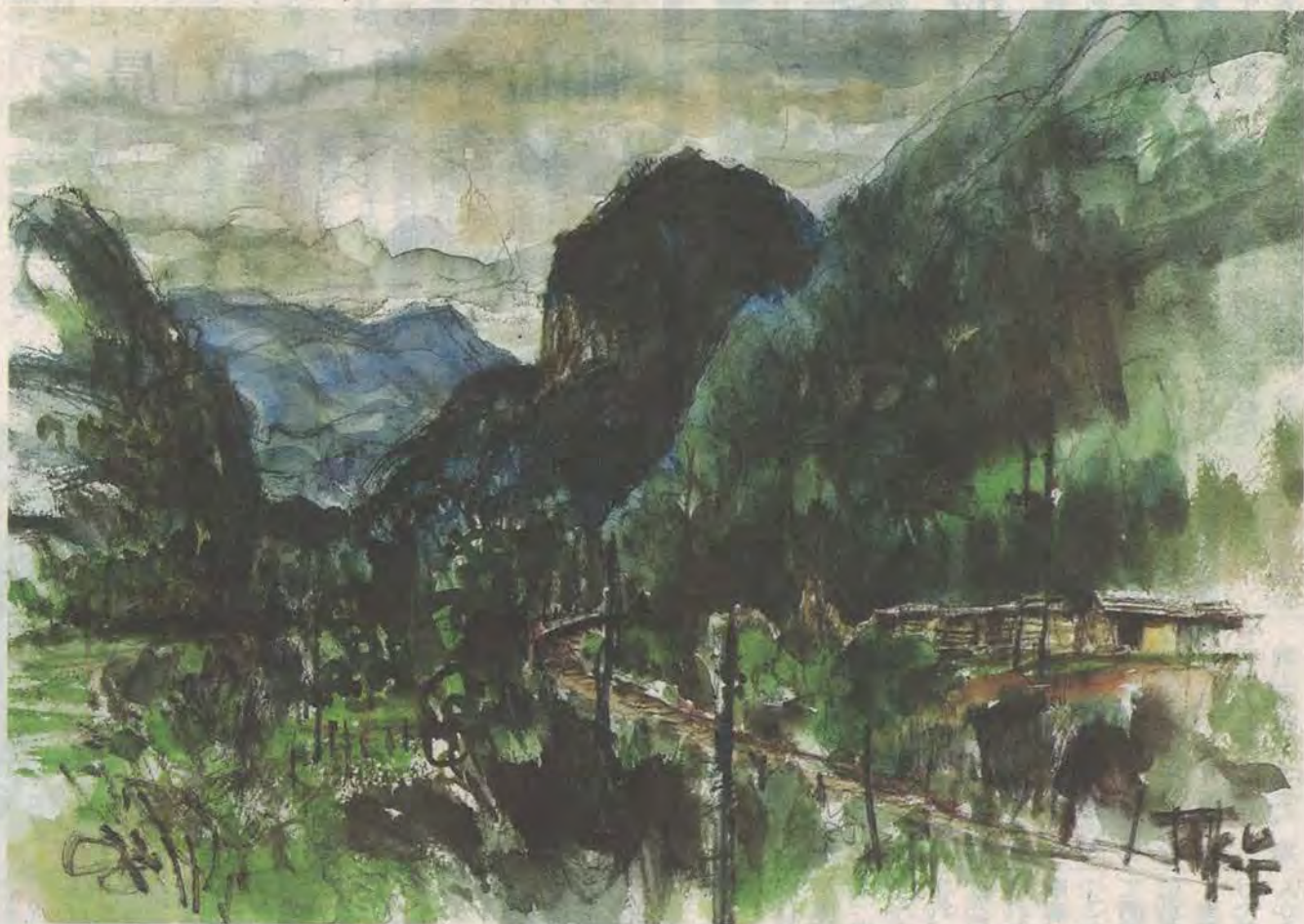
明治期、正岡子規は松尾芭蕉の

足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮

城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 心模様映し景色変化

作並街道



山路深く入れれば峰巒(ほうらん)形奇ならず。雲霧のけしき亦ただならず。



ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

「作並温泉に投宿す。家は山の底にありて翠色窓間に滴り水聲床下に響く。絶えて世上の涼炎を知らざるもの如し」

表題の句と前文は作並温泉に着いた子規の言葉だ。家とは現在の岩松旅館。私も子規の感じた作並時間を追体験してみたい、と、老舗に部屋を取った。

旅館の風呂は、長い廊下を降りた先にあった。もちろん湯船にスケッチブックを持ち込むことなどできるはずもない。「これは記憶が頼りの取材だな」と、タオルだけを手に廊下を降りていった。

露天風呂の傍ら、溪流が「こう」と音を立てる。「子規が見た風景が変わらずここにある」そう思ったとき、心にある言葉が響いた。学生時代学んでいた古代ギリシャ史の恩師、O教授の声だった。

「私の時計はね、2000年前で止まっていますよ。ありがとうございます」卒業時、私たちがプレゼントした時計を手に、師がつぶやいた言葉だった。師は、時を自在に行き来できる心を持って、と伝えたかったのではないか…。そう思った瞬間、長廊下に掛かっていた古い柱時計が脳裏にフラッシュバックした。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は30日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城真内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづる。

## 溪流の響き 変わらず

作並温泉①



涼しさや行燈うつる夜の山子規

ファミリー

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

前回書いたように岩松旅館ではその場で描くことはしていない。この絵は風呂から持ち帰った「記憶」を基に「印象」をぎくつと刻んだ素描を下敷きにした。前回の古時計の絵も制作過程は同じだ。

子規は言葉による「写生」にこだわった。とはいえ、どんな場合でもその場で紙と筆を即座に取り出したと考えるのは、ナンセンスだろう。絵も同じだ。

絵には想像力、そして記憶の連結力が欠かせない。もちろん現場アッサン力は必須だが。

まっさらな紙に向かい「記憶」と対話しながら、過去に見た風景を紡ぎ出す。

そこには描き手の過去何十年という経験が意識せずともにじみ出る。山や川、町並みや空を描き出したそれは、実は描き手そのものでもあるのだ。

今回の句は、旅館内でも案内されているが、彼が作並で詠んだ句を幾つかここに紹介しておく。

ちろちろと焚火すゞしや山の宿  
はたごやに投げ出す足や蛸のあと

私の子規の句に感じるのは、写生された印象にかぶる生々しい彼自身の姿だ。

(画家、イラストレーター)

次回8月13日掲載

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の

足跡をたどるために東北を旅し、

紀行文「はて知らずの記」を著し

た。子規が俳句に詠んだ場所を宮

城県内に訪ね、その足跡と「いま」

を水彩画と文でつづる。

## 句ににじむ自身の姿

作並温泉①



夏山を廊下つたひの温泉かな子規

# 子規の風景

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

回を重ねてきた連載も、次回が最終回だ。正岡子規は、宮城、山形、秋田、岩手と回り、汽車で上野に戻るのだが、子規の足跡を宮城にたどる本連載は、彼が山形へ抜けるところで一区切りとなる。明治26年7月27日に宮城入りした子規は、岩沼、仙台、松島、そして作並から山形へ。8月6日、関山の旧街道に最後の足跡を記し宮城を後にする。

私にとって、子規の関山越えのくだりでもっとも印象に残ったのは、句ではなく表題の一文だった。作並の宿を出発し、峠にさしかかるくだりだが、静かな山あいの情景が、音が、心に浮かぶ。

遠ざかる蟬(せみ)の音、山間をわたる鳥の鳴き声、そしてどこからかこだまするきこりの歌声。子規の聴覚が関山の陰影を際立たせる。そして、彼が宮城で詠んだ最後の句はこれだ。

隧道のはるかに人の陰すゞし  
子規のくぐった隧道(すいどう)は、現在の関山トンネルではない。閉鎖された旧道の奥に、それはある。私が旧道を訪れたのは初夏。通る人はもちろんなく、勢いついた緑が行く手を阻んでいた。

(画家、イラストレーター)

|| 次回は27日掲載 ||

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮

## 心に浮かぶ山の遠音

関山



蟬の声いつしか耳に遠く一鳥朝日を負ふて  
山より山に啼きうつる樵夫の歌かすかに  
其奥に聞こえたり。

ファミリー

「はて知らずの記」をたどる

古山 拓

机の上を中心に折り返した長いひもを置いてみる。折った部分をつまみ、渦巻きを作ってみる。中心へ向かうひもの片端はスタートへ戻っている。旅はそんならせんひもに思えてならない。はるかな旅路は同時に始まりへと還(かえ)る道だ。

子規はみちのくの果てを自指した旅で何を得たのか? どんなに遠くまで芭蕉の足跡をたどったとしても、しよせんはトレースだ。果てなど分かるはずもない。逆に「自分自身」こそが「目指すべき果て」だと気付いたのではないか。

子規は出羽路を酒田に抜け、八郎瀧まで北上、そこで折り返し帰路につく。水沢から汽車で上野に戻るくたりは実にあつけない。そして根岸の子規庵で詠んだ掲句で、はて知らずの記は終わる。

実は私はアトリエに「フランスエンド」なる屋号を掲げている。直訳すると「地の果て」だ。そんな私が、はて知らずの記と出会ったのは、この最後の回を書くためだったような気がする。

一番遠い果ては自分自身、そしてすべからず「果ては始まり」…。子規もまたそう思ったと信じたい。

(画家、イラストレーター)

明治期、正岡子規は松尾芭蕉の足跡をたどるために東北を旅し、紀行文「はて知らずの記」を著した。子規が俳句に詠んだ場所を宮城県内に訪ね、その足跡と「いま」を水彩画と文でつづってきた連載は、今回で終了します。

# 「自分自身」へ還る道

最果てへ 完



秋風や旅の浮世のはてしらず子規